

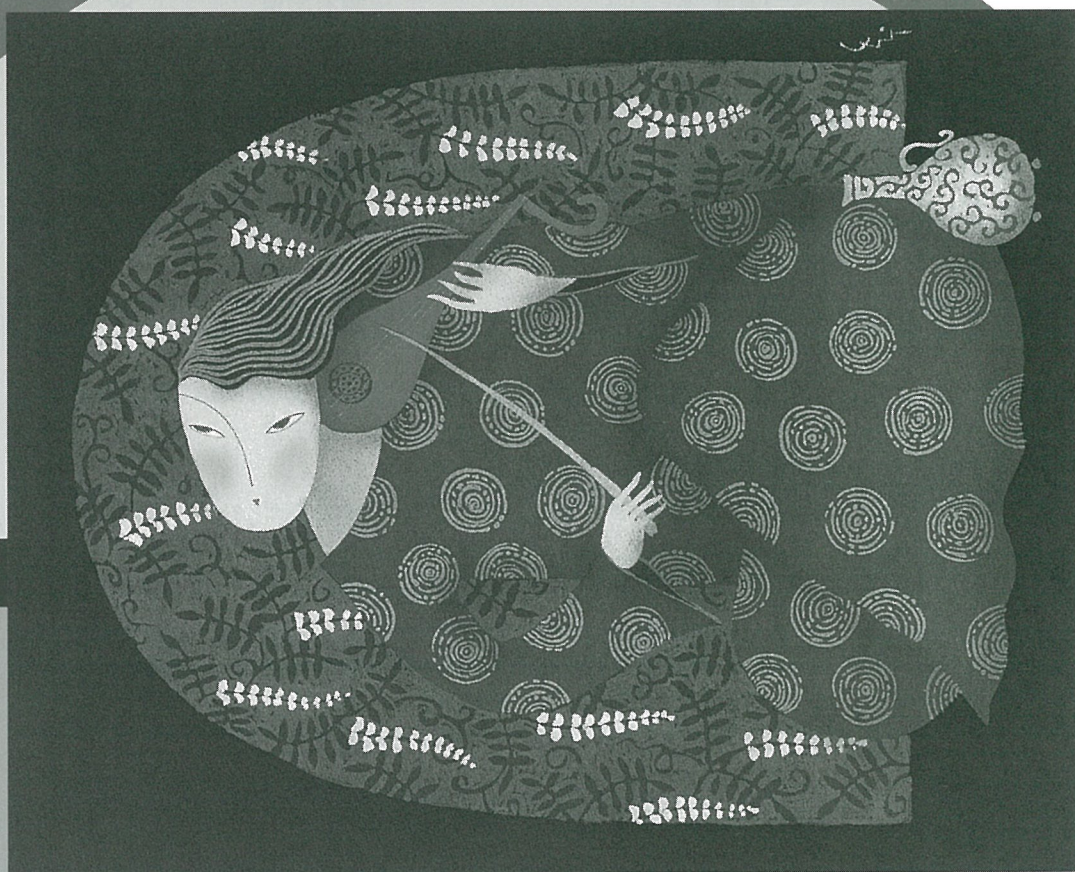
富山医科薬科大学
医学部同窓会報



2004. 第13号

富山医科薬科大学

医学部同窓会報



2004. 第13号

CONTENTS

- 4. ご案内
- 5. はじめに
- 6. 国立大学法人としての富山医科薬科大学 医学部長 倉知正佳
- 7. タカシヤマ 同窓会長 高田良久
- 11. わが師 佐々木博先生の叙勲を祝う 第三内科同門会長 宮林千春
- 13. 病院長賞を受賞して 杉谷の森合奏団団長 麻酔科学助教授 廣田弘毅
- 14. 〈定年退官寄稿〉
 新しい教育法に思う 第三内科教授 渡邊明治
- 16. 卒後臨床研修制度について 卒後臨床研修センター 副センター長 足立雄一
- 17. 特集 “卒業生の今現在、そして将来” Part8.
 三輪 高喜 (医 学 科 昭和58年卒)
 木田 泰弘 (医 学 科 昭和60年卒)
 河路 洋一 (医 学 科 昭和60年卒)
 山口佳代子 (看護学科 平成15年卒)
 片岡 智恵 (看護学科 平成15年卒)
 西島 潤 (看護学科 平成15年卒)
- 24. 首都圏富山医科薬科大学医学部同窓会について

 アヴェンティス ファーマ・臨床研究センター臨床開発第2部
 前田敏郎 (医学科 昭和59年卒)

染色工芸家。太平洋美術展・新人賞(1982年)、松吉賞(1984年)、太平洋美術会賞(1998年)受賞。各地工芸画廊をはじめ、日本橋高島屋(東京)、現代工芸藤野屋(栃木県佐野市)などで個展を開催している。また、1994年とちぎの美術女流作家100人展にも選ばれる。1999年銀座松屋にて個展を開く。いずれも好評を博す。栃木[蔵の街]音楽祭協力委員として地域文化活動にも貢献。縁あって本同窓会誌の表紙絵を1997年より依頼している。栃木県岩舟町在住。

25. 留学を終えて思うことー医薬大で研究することについてー
第一内科 薄井 勲 (医学科 平成3年卒)
28. 留学体験記
ウイルス学 佐藤仁志 (医学科 平成6年卒)
31. 特集：大学内教室紹介
生化学第一講座 高澤久美
母性看護学講座 豊岡文恵 (看護学科 平成9年卒)
36. 訃報 「友へ…」
中口和美 (看護学科 平成15年卒)
37. 第55回 北陸地区国立大学体育大会
第55回 西日本医科学学生総合体育大会
38. 栃木紀行
第一生理学 田淵英一 (医学科 昭和62年卒)
40. 平成15年度富山医科薬科大学関連病院長懇談会議事要旨
44. 平成15年度第22回医学部同窓会総会議事録
47. 富山医科薬科大学医学部人事消息
48. 平成14年度会計報告・平成15年度収支予算案
平成15年行事報告・平成16年行事予定
50. 職掌分担
52. 評議員一覧・編集後記

ご 案 内

開学30周年イベントとして平成16年度の富山医科薬科大学医学部同窓会総会を以下の日程で行うこととなりました。皆さん振るってご参加くださるようよろしくお願い致します。

日 時：8月28日(土)午後3時30分～

場所：富山全日空ホテル

〒930-0084 富山県富山市大手町2番3号

電話 (076) 495-1111

<http://www.anahotel-toyama.com>

内容：

1) 総会 午後3時30分～4時10分

2) 講演会 午後4時20分～6時20分

午後4時20分～4時50分

講師：医学部長 倉知正佳

午後4時50分～5時35分

講師：高麗橋総合法律事務所・弁護士兼医師 許功

午後5時35分～6時20分

講師：宇宙航空研究開発機構・主任研究員 大島博

3) 懇親会 午後6時30分～8時30分

※懇親会中程に杉谷の森合奏団による演奏会を開催

はじめに

いよいよ今年4月から全国の国立大学が特殊独立法人化されます。独法化に関連して、本学では既に多くの新たな取り組みが開始されています。

教育面では、1) ファカルティ・ディベロップメントという教育者(教官)の教育講座が行われ、2) コアカリキュラム、チュートリアル教育、EBM (Evidence based medicine)、OSCE (Objective structured clinical examination)、CBT (共用試験システム)等の新しい教育システムが導入され、3) 医学研究科に修士課程が設立され、4) 一般者や専門職を対象とした公開講座が開始されています。研究面では、1) 21世紀COE (Center of excellence)プログラム「東洋の知に立脚した個の医療の創生」において本学が研究教育拠点として選定され、2) 大学院医学研究科博士課程に“認知・情動脳科学”が独立専攻として認可されて大学院専任部門が誕生し、3) 知的クラスター創成事業として富山・高岡地域が「とやま医薬バイオクラスター」(本学では免疫学が中心となって免疫機能を活用した診断・治療システムの開発を行っています)の拠点として選ばれています。医療面では、1) 卒後医療研修制度(スーパーローテート)が開始され、2) 救急・災害医学講座および総合診療部が開設され、3) 電子カルテが導入され、4) 経営概念の導入が始まっています。このような取り組みは、全国規模で開始されておりますが、成功の有無は関係者各位の努力いかんによってすべて決まると考えます。

一方、紆余曲折があったものの2年後(2005年10月)に高岡短期大学、富山大学、富山医科薬科大学の3大学再編統合が決まりました。富山医科薬科大学における統合・再編問題の最新情報については本学のホームページをご拝読ください。さらに、三菱総合研究所と河合塾による産業界の視点を重視した大学評価によると、バイオテクノロジー分野(主として薬学部)で、なんと“A+”(上位5%の大学施設のみが該当)という最高の評価を得たことも特記すべき事項と思います。

最後に、このような変革期中、昨年末に学長選挙が行われ、第二生理学の小野武年教授が4月から新学長として就任されます。基礎系出身の学長は全国でもそう多くはなく、本学の特色として基礎系を重視しようと考えている教官が多くを占めた結果と言えるかもしれません。

このように、本学は教育・研究・医療の面において常に進歩を続けており、多方面から良い評価を受けています。たゆまぬ努力をする限り、本学の未来は明るいと断言できると思います。皆さんのご尽力を今後ともお願いしたい次第であります。

※これらの情報の一部は、<http://www.toyama-mpu.ac.jp/jp/index.html>をご参照ください。

(編集者)

国立大学法人としての 富山医科薬科大学



医学部長 倉知正佳

新年おめでとうございます。同窓会の皆様にはそれぞれご活躍のこととお慶び申し上げます。

さて、平成16年度から本学も法人化されます。国立大学法人には、文部科学省から「運営費交付金」が渡されます。文部科学省の説明によれば、これは、「大学の財政的自律性を高めるために、用途を特定しない渡し切り交付金とするものである」、「特定の組織の新設・拡大、その財源としての経費の抑制、不要ポストの削減といった学内資源の再配分は、……大学自身の手で決着をつけることが求められる。……最終的には学長が意思決定を行うことになる」、そして「大学の意思として社会の要請をどう受け止め、どう貢献していくのかを、大学の側から社会に提示していく必要がある」と述べられています。したがって、文部科学省が認めてくれないから、必要な診療科や講座を設置できないという言い訳はもういけません。

大学の役割としては、教育・研究・社会貢献があると思われませんが、多くの国立大学法人に求められていることは、教育機能の強化と社会に貢献する人材の育成です。本医学部では「優れた医療人を育成する」ことが重要な目標になると思います。大学教育では学部教育がまず重要ですが、これからの日本が本格的に取り組むべき課題として卒後教育（卒後研修、大学院教育、そして生涯教育）の整備・充実があります。

学部教育については、学科長が中心になり仕上げられた新カリキュラムが平成16年度より医学科の全学年にわたって実施されます。地域と連携した医学教育という点では、関連教育病院を1つから9つに拡充し、臨床教授も増員しつつあります。新設の救急・災害医学講座に続いて、総合診療部の教授も決まりましたので、この分野の教育も充実すると思います。

卒後研修については、本学附属病院は地域の協力病院と連携した研修システムを構築し、平成16年4月から43名の臨床研修医を迎える予定です。人材育成については富山県下のいくつかの基幹病院（富山赤十字病院、高岡市民病院、済生会富山病院、済生会高岡病院、あさひ総合病院、国立療養所富山病院など）では、すでに本学出身者が医師の過半数に達しており、今後、本学の地域医療における責任もますます大きくなると思います。大学院教育については、「東洋の知に立脚した個の医療の創生」（21世紀COEプログラム）に加えて、認知・情動脳科学独立専攻（平成16年度新設）も国際的な教育研究拠点として発展していくことが期待されます。

平成17年10月には富山県内2大学との再編・統合も予定されています。本学では、法人化の初代学長が内定したことであり、教職員が力を結集して地域性と国際性を併せもつ活力ある新大学が創設されることを願っています。では、同窓会の皆様のみますのご活躍をお祈りしております。

タカシヤマ

同窓会長 高田 良久

下村先生の話は何時間聞いても感銘深い。1カ月前に富山の学会で聞いた話にもう新たな話題が付け加えられている。今回のトピックスは「グリメピリドという薬剤がアディポネクチンを増やす」ということだ。アディポネクチンは下村先生が発見された物質で、脂肪細胞から分泌され、糖尿病の発症や動脈硬化の進展を防ぐ作用があるという。病気を抑えるアディポネクチンを増やす薬剤とは画期的ではないか。下村伊一郎先生、平成元年大阪大学医学部卒。そして15年後の現在、同大教授に就任されている。数場所で十両から横綱に昇進したようなスピード出世である。優れた人材を積極的に評価登用し、しかも支える阪大の器量がすばらしい。足の引っ張り合いの好きな所ではまず起こり得ない快挙である。今回のトピックスは、わが恩師、富山医科薬科大学小林教授とのcollaborateから生まれたとのことだが、このグリメピリド、実は不肖私が富山で研究していた頃、扱っていたアイテムでもあるのだ。私は小林先生やanother高田先生の御指導の下、本剤の添加でジアシルグリセロールという物質が3T3脂肪細胞で増えることを示し、本剤の血糖降下作用には脂質代謝が関係するのではないかという論文をものして、1996年のJournal of European Pharmacology（ヨーロッパ薬理学雑誌；思いのほかインパクト・インデックスが高い！）に掲載されたのだった。わが研究生活の一大記念碑、人はこれを「瞬間最大風速」という。拙論が現在の研究の展開に貢献しているか否か、これは何とも言えないが、脂肪細胞に眼をつけたのはあながち的外れではなかったようだ。

2003年6月28日、下村阪大教授、小林富山医科薬科大学教授、河盛順天堂大学医学部教授という、我国の糖尿病学をリードする阪大三羽鳥ともいべき諸先生が一堂に会した研究会に出席し、興奮の内にタワー棟29階の部屋に引き上げたのだが、夜更けて、赤坂見附や一つ木通りを一人見下していたら、一抹の寂しさが忍び寄ってきた。明けて29日。朝食は“サツキ”。“なだ万”は待つし、おかわりもしにくい。“トップ・オブ・ザ・タワー”は高く気持ちよさそうだけれど、洋食だけというのがいただけない。サツキなら和洋どちらもいけるのだ。朝粥に、海苔の佃煮、梅干し添え。温泉卵に筑前煮。野沢菜、一口大根、鮭の切り身焼きに蒲鉾2切れ。イタリアンドレッシングをかけた生野菜、メロンに西瓜に蜜柑。ト

マトジュース、オレンジジュースにクロワッサン蜂蜜添え、といった朝食を平らげ、これも見所の庭園を散策。まだある時間は、部屋でくつろぎながら、Symphoniaで出たアントネットの新譜「メルーラ作品集」と、安田先生が雑誌で「特別なトランペットを使った史上初の試み」と紹介されたニケ&コンセル・スピリチュエルの「水上の音楽」を聴いた。両盤ともおもしろい。

そうこうする内にチェックアウトの時間となった。家に電話したら、明日からの食材の買い出しが必要だという。日本橋高島屋へ行こう。外堀通りで新橋まで行って昭和通りに入ろうと思ったら、混雑とある。それなら、と溜池を左折、祝田橋から内堀通り、永代通りと思ったが、内堀通りの日曜日通行止めを忘れていた。日比谷通りへの左折は長蛇の列。それで銀座4丁目の混雑を案じはしたが、空いた晴海通りへ。意外にすんなり三原橋に辿り着いた。昭和通りを江戸橋まで行って永代通りへ曲がり、兜町の地下駐車場に入ろうとすると、係員が呼び止める。地下混雑のため、この先から入って地上に止めて欲しいとのこと。そういえばお中元シーズンである。店内は何時になく人が多かったが、それ以上に目立ったのは、立ち働く従業員の数である。改めて百貨店というのは何とも人を使う産業だと思う。例えば、ダルマイヤーは、ハム、ソーセージを塊で並べておいて、客の注文に応じスライスして量り売りする店だが、そのために注文を聞く者が3、4名、スライスに2名ほどの人出を要している。中元歳暮のシーズンは、その客用に1、2名をつけるから、最大8名である。パック詰めハムソーセージなら、並べておけばよく、人出は要らない。もちろんモノの違いはあるが、その辺のスーパーに比べれば、一桁値段が違うのもそう考えれば仕方がない。これだけの雇用を維持するにはそれなりの売上げがなければならないだろうからだ。

スライスを待つ間、パン屋へ廻った。まずフォーション。今まで食べたパンの中では、一番気に入っているブルを1個買う。1個だけ買うのは格好のいいものではないが、甘い菓子パンの類はカロリーばかり増えて本当に美味しいとは思えない。それで敢然とブル1個を買うのである。ちなみに190円。それから、最近人気が出てきたベックのパンもよい。ちょっと塩味の効いたチャバナッタとかいう平べったいフランスパン、いや、ベックはたしかミラノの店だからイタリアパンか。こちらは130円。以前はフォーションが行列でもベックは閑散としていたが、最近ベックにも結構客がいる。現地の味が高島屋で買うものと全く同じかどうかはわからないが、それでも、フォーションとベックのパンの味わいには、クーブランとヴィヴァルディ、グノーとヴェルディの違いがあるように思う。それから、横浜生まれの私には不可欠の崎陽軒のシウマイも買い込んだ。

大阪の中尾先生に言わせると、難波の高島屋は、自転車でおかずを買いにいくところだそうだが、日本橋高島屋の前に自転車を止めるのはちょっと勇気がある。自転車でおかずとな

ると、東京なら浅草鳥越のおかず横丁だろう。高島屋は、兜町に車を止めて、店差し回しの黒塗りのハイヤーで乗り付けるのがいい気分なのだ。家からハイヤーなど、庶民にできることではない。しかし、百貨店のこうした送迎サービスは、ふだんと違った「気分」を味わわせてくれる。これはちょうどテーマパークのような楽しみではないか。だから、私は店の隣の駐車場の順番を待つなどということは絶対にしない。待つのも嫌だし、それではジャスコやダイエーと選ぶところはないからだ。また、カラフルなタクシーもダメだ。やはり、黒塗りのハイヤーなのである。ある人の東京散歩に書いてあった話だが、高島屋と三越、日本橋を挟んで数百メートルしか離れていないのに、訪れる客は、高島屋派と三越派にきれいに別れるそうだ。たしかにそのようだ。私の母は三越派である。小さい頃住んでいたのが三越のまん前で、その店内が遊び場だったというから無理もない。三越の何階には何の店がある、などということはすっかりそらんじているのだろう。母に言わせれば、高島屋はどこに何があるのかわからない、ということになる。私は、といえ、三越派の母をもちながら高島屋派なのだ。小さい頃、横浜に住んでいたからかもしれない。私が子供の頃の横浜には、デパートは3軒しかなかった。横浜駅西口の高島屋と伊勢佐木町の野沢屋松屋である。子供心にも連れて行ってもらって楽しかったのは高島屋だった。おもちゃ売場の品揃えとか、屋上の遊具の充実など、もちろん他愛のない理由からではある。しかし現在、改まった方への贈答品選びに、日本橋高島屋の洋食器売り場へ行けば、ベネチアングラスがあったり、ボヘミアングラスがある。かつてはアウガルテンがあった。今はヘレンドだが、オーストリアとハンガリー、歴史をたどればおなじハプスブルク帝国の版図だから傾向は似ている。HOYAやノリタケ、ウェッジウッドにとどまらない、それがいいのだ。

一方、日本橋三越の記憶はあるにはあるが、芳しくない。1階から吹き抜けの天女の像が子供には不思議な近寄り難いモノに見えたからである。今になれば、ああした空間を作り出した三越のセンスに敬意を表すし、三越音楽隊や三越劇場など、単にモノの売り買いだけでなく、そうしたコミュニティにも配慮した三越の姿勢にはすばらしいものがあるとは思ふ。私にしたところで、何年か前の日本橋祭りの折にあの像の前で、美空ひばりの曲を弾いて売出中のヴァイオリニスト、幸田聡子さんの「こぶし」の効いたクライスラーを聴かせてもらった。これは高島屋にはない三越の味である。では、三越に鞍替えするかというと、高島屋からシャトルバスでもでていない限り三越へ足を向けることはおそくないだろう。4歳になる下の子は、なかなか物覚えがよく、どこへ行って何を買ってもらったかをよくおしゃべりする。最近、フクヤヤ（福田屋；栃木の百貨店）、ダッコ（ジャスコ）、カワチ（栃木のドラッグストア）、マクダアド（マクドナルド）に加え、タカシヤマ（高島屋）を認知するようになった。この子も、「高島屋派」になるのだろうか。百貨店の好みでさえ、そうした幼い頃から

の積み重ねなのだ。

先日ある会合で、「東京文化会館へ声楽のリサイタルを聴きに行ったら、高名な評論家先生が近くの席で、親しくご挨拶申し上げた」と得々と語る御仁を見かけた。それで、その評論家先生とその日の声楽家の歌いぶりが評判通りのすばらしいものだったか、評判倒れの代物だったか、かつての名歌手と比べたらどうか、最近ではほかにどんなコンサートが感銘深かったか、いろいろ話が弾んだのか、と思えばどうもそうではないらしい。東京へコンサートを聴きに行き、評論家先生拝眉の榮に与った、どうだ、自分はすごいだろう、文化人だろうということをおっしゃりたいようなのだ。鼻白む思いだったが、そうした田舎文化人に憧れの眼差しを注ぐ取り巻きもあるようだから面白い。なるほど、そうして、東京へ行く＝高級ファン、評論家と挨拶する＝実力がある、などといった默契を共有する閉鎖的で排他的な田舎文化人サロンが形成されるのだ。彼らの特徴は価値の外在にある。東京に行ってまで音楽を聞く稀な機会、無名の新人ではダメだ。世界的に高名な演奏家でなくてはならぬ。しかし、かつて我国で高名だったロシアのピアニスト、スタニスラフ・ブーニンや、イギリスのオーケストラのメンバーは誰一人として知らなかった。メディア頼りの情報とはせいぜいそんなものだそして、田舎文化人は「誰先生はこう言った」と、後で新聞評か何かを読んで演奏会を語る。その場で「私はこう思った」とは言わない。自己の感覚に自信がないからだ。たしかに誰先生の言葉を復唱すれば「間違い」はないし、復唱する田舎文化人を誰先生並だと思ってお人好しもあるのかもしれない。もっとも、田舎文化人が自ら語ることのできるのは、会場の名称とチケットの値段くらいなものかもしれない。それには自ら関与しているが、演奏会の選択も、聴いた感興も、皆他人のもの、すなわち、外在しているからである。そうした人々のサロンには、行動に裏付けられた共感がないから高齢化と衰退以外何も生まない。しかし、音楽芸術への価値観を内在していれば、奏者、演目、何か面白そうな演奏会なら、無名だろうと、見知らぬ会場だろうと出かける。そうして自分の言葉で語る。知識や経験こそ、愛好家と専門家では雲泥の差があるが、行動の証を自らの言葉で語れば、接点と共感が生まれる。その多寡が実力だろう。そうしてそれらは協働 (collaborate) につながるのだ。

鼯鼠の客は、どこに何があるかがわかっていて、そこでなければ手に入らないものをきちんと繰り返し手にいれるに違いない。しかし、その店の包装紙に包まれてさえいれば、中身の価値を問いはしない客もいる。そういう客は、扱い易い反面、危険でもある。そうした客には店を育てる力はないからだ。そうした客は、別の店が話題になれば、すぐにそちらに鞍替えするし、そうした客に媚びた品揃えでは、鼯鼠の客は満足せず足が遠のくからである。そうなると店は早晚傾く芸術文化、とりわけ、西洋音楽のような外来の芸術文化を、田舎文化人が繁茂する地域で育成する難しさもその辺にある。